

演技が導いた「行為」の像

——『殺人という行為』を見る

朝倉加葉子 (映画監督)

私は人がショッキングに殺される映画を見るのが好きだ。そして見たいが故、自分の映画では悉く人を殺してしまう。殺しのやり方、死んでしまう演技、それを物語る撮影のアイデアを見ると、震えながらも充実した気持ちになる。なんだか得した感じがしてしまうのだ。勿論実際の殺人は決して見たくない。実際に自分が恐怖を味わう代わりに「見るだけで済んだ」のが嬉しいのかもしれない。人が殺される行為を恣意的に撮影したものはその労力や費やす時間の分、死に真っ向から立ち向かっているはずなのに、それが手が込んでいればいるほど死への意識を鈍らせ、安心感すら獲得する。

殺人部隊のメンバー達は「私を女優にしてください」とばかりに監督の「殺人を再現して映画にしないか」という提案を嬉々として実行する。何万人も殺したであろう彼らだが、倫理の基準が少し違うだけで決して狂人ではなく、撮影を動かし進めているのはその彼らの甘い追憶だ。アメリカ映画に憧れて（私もそうだ）殺人を行っていたという彼らは、格好良い英雄と自任する自分達の殺人を思い通りに演出していく。やがて実際にはしていなかったであろう「血を欲している顔」の演技を仲間要求するまでになり、次第に現実の過去をフィクションの行為が乗り越えていく。そして、凝って再現された殺人シーンからは実録の感触は決して感じられず、リーダーが夜中に何故か自分の歯をペンチで抜いているほうが何倍も「人を殺してきた人物」を彷彿とさせる。特殊メイクを試したかったのだろう、リーダーが生首を切られる直接的な殺人描写の撮影もどこか平和な趣だ。

しかし、集落の大掛かりなセットを使っただけで、その後強盗強姦殺人が続くであろう放火シーンの撮影の際、参加した女性や子供達がショックで号泣し放心する。過去の記憶を持たず、映画への憧れを共有しない彼女らは「見るだけで済む」ことなく恐怖を実体験し、現実には撮影＝フィクションに浸食される。また、その様子を予想外といった顔つきで見つめるリーダーにも、撮影で反芻する幾多の殺人の記憶が過去を乗り越えて襲いかかる。自ら考案した自慢のワイヤー技で殺される自分の演技に誘発され、人を殺し続け獲得した確かな死の体験とフィクションとが混じり合ったイメージに襲われて動けなくなった彼には、甘い追憶だった穴を見つめ続ける人生が残された。

もし1965年にハンディカムがあり、タリバンのように彼らも人に見せるため殺人を撮影していたらどうなっていただろう。時を経てフィクションで演じることによって倫理の俎上から逃れて、純粋に「行為」は浮かび上がった。殺人が単なる行為であること、しかし否応無しに人々の体温が上がること、そしてとてつもない恐怖を伴うこと。何十年と堅牢に支持されてきた「この殺人は善行である」という彼らの倫理を本能が粉々に打ち砕くほどの「行為」であることの紛れも無い立証の様には、戦慄を覚えすにはいられない。

「行為」を作りそれを見る、という双方向からのアプローチによってこの映画は、屈指の主役俳優を生み出し、また同時に、観客としての彼から今までの人生を覆すほどの最大の反応をも引き出した。その強靱な力はこれからこの映画を「見るだけで済む」観客達のことも大きく揺さぶるのは間違いないだろう。